

## 編集後記

- 「昭和」は63年で終わり「平成」と替わった。そのためか、段々と「昭和〇〇年のこと」などと言われると「はて、何年前だった？」と咄嗟に計算が出来ない有様である(私だけか?)。と云うわけで、本誌記事中の和暦年号表記をやめて西暦に統一することにした。
- 少子高齢化の時代、大学は生き残りに必死である。歴史を誇る我が校も、有名校の名に甘えては居れない。その上、社会情勢、特に経済構造の変化による就職難にも対応を余儀なくされている。優秀な人材を社会に送り出すためには、勉学に励んでもらわねばならない。講義や実習の出席を重要視し、試験も難しくなる。当然であり、良い事ではないか。
- そのために、「合宿に全日参加が出来ない、部活にも支障がある」と聞く。分かるが条件は何処の大学も、どの部も同じであろう。これを理由にしていたのでは強きはなれない。およそ、勉学とスポーツの両立など掛け声倒れになる。
- 現役諸君、勉強しろ！必死で。合宿で抜ける分、一般学生の倍勉強に励め！その努力と姿勢が先生に通じるまで。「あのA君が合宿のためなら、欠席も止む無し」と先生に認められるまで。
- 勉学もスポーツも、より抜きん出るためには、覚悟と努力を惜しむな。「ブレイクスルー」というのは、その気の無い者にはやって来ない。スポーツをやることの意義の一つは“自己変革”であることを忘れるな。
- と、ここまで書いたところで、全国大会最終日であり、学連HPで成績発表を確認して愕然として我が目を疑った。全期間を通して選手3名が得点無し、0点では順位の付け様がない。最下位である。監督・コーチングスタッフ・部員の諸君、君達が出した期末試験の成績である。諸君はこの結果を何と捉える。敗因の原因(理由付け)は幾らもありそうだが、諸君の方からそれは語るべきではないし、聞きたくもない。語るべきは、これまでの練習体制と部活のあり方を真摯に見詰め直し、改めるべき点を徹底的に改めて一から出直す。これ以外に体育会傘下の部としての再出発は有り得ない。“勝ちに不思議の勝ちはある、負けに不思議の負けは無い”スポーツの勝負について言い古された格言であるが、今こそ噛みしめてみるべきであろう。新人を迎えるその日から航空部全体も部員個人も“自己変革”をしてあたらないと、またぞろ、ズルズルと安逸に流れることになる。それを最も恐れる。
- これでは、翔友会も支援のし甲斐が無い。「ここで一押し経済的に支えてやれば強くなる」という状況でこそOBの支援もお金も生きるというものである。そういう状況になるまで、学生も指導陣も「支援してくれ」とその根拠も無く甘えないことだ。
- 厳しいことばかり書いた。これも航空部を愛して止まないが故に。
- 今年も本誌をお届けすることが出来てほっとしている。依頼に応じて原稿執筆を頂いた方々に深謝し、翔友会員全員のご健勝を祈りつつ。

---

翔友 XXVIII (非売品) 編集 翔友会  
平成25年 6 月 1 日 発行 同志社大学体育会航空部  
印刷 河北印刷株式会社

京都市南区唐橋門脇町28番地

---